

演出された無秩序

著者	石川 榮吉
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	26-35
発行年	2006-02-24
URL	http://doi.org/10.15021/00001604

3 演出された無秩序

3 演出された無秩序

- 3.1 ウィリアム・エリス
——ポリネシア研究の先駆者
- 3.2 エリスのハワイ報告
——王の死後に起こること
- 3.3 死者の財産破壊
——ポリネシア諸社会の事例

- 3.4 首長の死に続く無法・無秩序
——サモアとタヒチの事例

- 3.5 無法・無秩序を演出する理由
——ひとつの仮説——

- 3.6 ポリネシアの大首長の本質
——「むすび」にかえて——

3.1 ウィリアム・エリス——ポリネシア研究の先駆者

19世紀初めころにロンドン伝道協会の宣教師として、南太平洋とりわけ東部ポリネシアでの布教に献身した、ウィリアム・エリスという人物がいる。キリスト教関係者のあいだではかなり名の知れた人物のようであるが、およそキリスト教と無縁な私に彼について知ったのは、宣教師としての彼の業績によつてのことではない。かねてポリネシア人とその文化に関心をよせていた私は、欧化以前のポリネシアの伝統文化にかんする、信頼するにたる数少ない情報提供者の一人として、彼を知ったのであった。

エリスには、*Polynesian Researches*と題する4巻本の著書があり、これが、欧化の波をかぶり始めたばかりで、まだ土着の伝統文化が大きくは変容していない、19世紀初めのポリネシアの姿を伝える、すこぶる貴重な情報源なのである。キリスト教宣教師としての多年にわたる現地滞在の体験が、その基礎となっているからである。

エリスがロンドン伝道協会の宣教師としてソサイエティ諸島に赴いたのは、1817年のことであった。タヒチ島を含むソサイエティ諸島の存在が、ヨーロッパ人に知られるようになったのは、1767年に艦長サミュエル・ウォリス指揮するイギリス軍艦ドルフィン号が、この群島を初めて訪れてからのことである。その後、フランス人ブーゲンヴィルやイギリス人キャプテン・クックなどの探検航海者があいついで訪れ、18世紀の終りごろには、ソサイエティ諸島の状況について、ヨーロッパ人はある程度の認識をもつことができるようになった。そればかりではない。とくにキャプテン・クックの3回にわたる太平洋探検航海を通じて、太平洋全体の地理像が、ヨーロッパ人にかなりはっきりととらえられ始めたのである。

こうした情勢をうけて、イギリスの宗教界に、太平洋諸島への関心が高まり始める。もちろん、あらたな布教地としてである。1795年に設立されたロンドン伝道協会による、伝道船ダフ号の南太平洋派遣が、その実行の第一着手であった。ダフ号は1797年に南太平洋海域に入り、タヒチ、トンガタプ（トンガ諸島）およびタファアタ（マルケサス諸島）

にそれぞれ伝道の基地を設ける。エリスのタヒチ赴任はその20年後にあたる。ウォリスによるタヒチの「発見」からかぞえれば、すでに半世紀を経過しているが、島民の伝統文化にまだそれほど大きな変化はなかった。

ダフ号の宣教師たちがタヒチ島に上陸した当時、この島には全島に君臨する王も政府もなく、地方ごとに割拠した大小の首長連中が、互に勢力争いに明け暮れていた。まともな布教活動などのできる社会状況になかったわけである。タヒチがポマレ王朝のもとに統一をみるのは、1815年のことであり、こののちようやく布教活動が実効をあげ始める。その緒についた時期に、エリスは着任したことになる。したがってエリスは、まだ伝統文化の色濃いタヒチ社会の中に身を置くこととなったわけである。

エリスがポリネシアに滞在した期間は、1817年から25年までの約8年間である。この間、彼がおもに滞在したのは、タヒチ、モオレア、ファヒネなどのソサイエティ諸島であったが、その他、ソサイエティ諸島の南方に位置するオーストラル諸島（ラパ、ツプアイ、ルルトウ）なども訪れており、また、ポリネシアの辺境にあたるニュージーランドとハワイ諸島にも滞在したことがある。とくにハワイ諸島では、すでにここで宣教活動に従事していたアメリカの3人の伝道師とともに、群島中で最大のハワイ島を訪れてこれを一周し、有名なキラウエア火山にも登山している。これは白人として最初の壮挙であった。

このハワイでの体験を、エリスは、*A Journal of a Tour around Hawaii, the Largest of the Sandwich Islands* という1冊の本にまとめて、1825年に刊行しているが、これが当時のイギリス読書界にすこぶる好評を博した。そこで彼は、これの増補版を *Narrative of a Tour through Hawaii, or Owhyhee* の表題で1827年に出版し、さらに2年後の1829年には、タヒチ、ファヒネなど他のポリネシアの島々の事情を *Polynesian Researchs* という2巻本にまとめている。これもまた好評で、1831年にはさきに出版したハワイ紀行をこれに加え、さらに若干の改訂を施したうえで、小型の4巻本に改版して再刊している (Ellis 1969)¹⁾。

小型本とはいえ、総ページ数にして1730ページにおよぶ大作である。扱っている地理的範囲はタヒチ、ファヒネをはじめとするソサイエティ諸島、その南のオーストラル諸島、ハワイ諸島、ニュージーランドなど、彼が滞在したり訪れたりしたことのあるポリネシアの島々を含み、内容的にはポリネシア人の歴史、自然環境、動植物、住民の生業、風俗習慣、社会組織、土着宗教、神話、さらにはキリスト教の宣教活動にまでおよび、まさにポリネシアにかんする百科事典的報告書といえることができる。

エリスはこの大著をものするために、彼に先立つ先輩宣教師たちの報告書や見聞談も利用してはいるが、全篇の骨子をなしているのはあくまでも彼自身の直接の観察と体験とであり、このことが記述をいきいきと躍動的なものとし、読者を魅了せずにやまないものである。

こうしたわけで、エリスの上で述べた著書は、欧化以前の伝統文化がまだ色濃く残る、

19世紀初葉のポリネシアの実相を活写した民族誌的歴史資料として、およそポリネシアの伝統文化に関心を抱く人びとのあいだに、きわめて高い評価をかちえているのである。

3.2 エリスのハワイ報告——王の死後に起こること

そのエリスの著書のなかに、ハワイの首長の死にまつわる、はなはだ興味深い社会慣行の記述がみられる。それはつぎのようなものである。

ハワイ諸島には、王や首長連中が死ぬと、これをほとんどあらゆる種類の無法と悪徳のおこなわれる機会とすることが、社会的慣行としてみられた。王や首長が息をひきとるやいなや、社会は、どんな野卑な人びとのあいだにもめったに見られぬような、無法・無秩序状態を呈するのであった。人びとは裸体のままで走りまわり、放火、破壊、略奪をほしきままにし、ときには殺人さえも犯し、悪鬼のごとくふるまったのである (Ellis 1969: 175, 177)。

エリス自身は、こうした情景をじっさいに目撃したわけではない。彼がハワイを訪れた1822-23年当時には、すでにこうした習俗はおこなわれなくなっていた。当時は、カメハメハ大王によるハワイ諸島の統一 (1810年) から10余年を経て、ハワイ王国がカメハメハ二世の治世下にあった時代である。1819年に、それまで前王によって擁護されていた伝統宗教が公的に放棄され、その翌年にはアメリカからプロテスタント伝道団22名が来島して、キリスト教の布教活動を開始していた²⁾。こうした時勢にあって、上に述べたような習俗が影をひそめたのも、むしろ当然というべきであろう。

しかし、全くの遠い過去の記憶になりはてていたというわけでもない。エリスは、それを、「ごく最近まで」おこなわれていたと述べるばかりか、その名残りのな事件に際会してもいるのである。

1823年9月16日に、カメハメハ二世の生母ケオプオラニがマウイ島で死去した。問題の事件がおこったのはその前後のことである。

マウイ島の多くの人びとは、王母ケオプオラニの臨終まぢかと知るや、めいめいの財産を宣教師の教会領に運びこみ、そこにとどまる許可を求めた。それというのも、ケオプオラニの死後に例の暴動がおこり、財産の破壊や略奪の憂きめに遇うことを恐れ、教会領をそうした災厄から免れうる「聖域」と考えたからであった (Ellis 1969: 175, 177)。

実際には、そうした乱暴狼藉はおこらなかったのであるが、人びとをこのような避難行動に駆りたてたほど、その社会慣行についての人びとの記憶は、当時なおなまなましかったわけである。

さて、それならば、この慣行はいったいどのような意味をもっていたのであろうか。

エリス自身にその説明なり解釈はみあたらない。意味を探る手がかりとして、まず他のポリネシア諸社会における類例をみとめてみることにしよう。

3.3 死者の財産破壊——ポリネシア諸社会の事例

ポリネシアは広大な空間を占める海洋と島々の世界であるにもかかわらず、島ごとの偏差を越えて、言語と文化の共通性がいちじるしい。これは、ポリネシア人がいまでこそ広漠たる大洋に散在する多数の島々に分散居住してはいるものの、もと一つ源泉に出たものであるからにほかならない³⁾。

ポリネシア諸社会に類例を求めるのは、この理由からである。

相手かまわぬ乱暴狼藉とはいかないまでも、ポリネシアのあちこちに散見される習俗として、死者の財物を破壊する行為がある (Williamson 233-287)。この場合、破壊される財物には二種類ある。そのひとつは死者が病臥中に使用していたか、あるいは死後その屍体に触れるかしていた品々であり、他はそうしたことにかかわりのない、死者の生前の所有物すべてである。

前者に関しては、たとえばマルケサス諸島 (Handy 1923: 111) やタヒチ (Oliver 1974: 494) では、死者が病臥中および死後に触れていたもの——ベッド、マット、衣料、食器等々——のいっさいが焼却された。マルケサスでは、死者が病臥していた住居さえもが焼き払われた。こうした焼却は、浄化の火によって死の不浄を除去するため、と土着宗教の司祭によって説明されている。

ところが、このような、死者が死の前後に触れるか使用するかしていた品物の、焼却による破壊とは別に、生前の身の回り品や道具類を破砕することもあった。タヒチのある女性首長が死んだおり、彼女の身の回り品や特別に愛着のあった品々を、遺体とともに墓所に納めたが、そのさい、それらの品々は、こなごなに壊したうえで納められた、というロンドン伝道協会宣教師の手になる、19世紀初めの記録が残されている (Oliver 1974: 494)。

破壊する品がそれだけにとどまらず、故人の所有にかかる耕地や樹木にまでおよぶばあいもあった。たとえば、ツアモツ諸島では、死者がでると、人びとはただちに死者の持ちものを燃やすばかりか、彼の畑も壊わし、彼のココヤシの木を伐り倒した (Williamson 1933: 275-276)。ニウエ島でも、死者のすべての畑が毀たれ、ココヤシをはじめとする果樹類が伐り倒されたうえ、海に投げ捨てられた (Williamson 1933: 278)。

こうした破壊行為の理由として、これまでになされてきた説明には、4つのものがある。

その1は、死者 (の魂) が死後においても生前の財物を用いるよう、それらの財物を所有者同様に死なせて (破壊して)、財物の霊質だけを死者に同伴させる、というもの。

その2は、死者に生前属していたものはすべて、それが死の前後に死者によって触れられたと否にかかわらず、死霊がとりついていて危険きわまりないから、というもの。

その3は、邪術によって死者の霊を操作しようと待ちかまえている敵対者によって、死

者の遺品が邪術の手段に悪用されることを妨げるため、というもの。

そして最後は、以上の諸説と違って世俗的な説明である。つまり、死者の遺品が他人に盗まれてその所有物にされることを防ぐため、というものである。

これらの説明は、資料採集者もしくは研究者の解釈というだけでなく、その慣習をもつ人びと自身の説明でもある。どれもがもっともらしく、にわかになどれか一つに決定的理由をしぼることは困難である。

畑や果樹まで含めて、死者の財物を破壊するこの慣習は、一見ハワイの場合との類似を思わせるが、つぎの諸点で根本的に相違しているとせざるをえない。

ハワイのばあいには、その慣習の契機となる死者は、原則として王もしくは首長にかぎられる。誰が死んでもというわけではない。他方、破壊の対象とされる財物は、死者のものだけにかぎられない。相手かまわず誰のものでも、手あたりしだいに破壊の対象とされ、破壊ばかりか掠奪されたり放火されることもある。さらに、攻撃が人間にむけられ、傷害や殺人さえおこなわれることもある。まったくの無法・無秩序状態の現出といつてよい。こうみえてくと、ハワイのばあいを、ポリネシアにかなり一般的な、死者の財物破壊の慣習の、一変異とみなすことはとうていできがたく思われる。他に類例を求めねばならない。

3.4 首長の死に続く無法・無秩序——サモアとタヒチの事例

捜してみると、ハワイのそれによりよく似た慣習を、サモア諸島のサヴァイイ島にみいだすことができた。これは、中央ポリネシアの宗教観念を論じた、ウィリアムソンの著書の中に紹介されている話である。

サヴァイイ島では、首長が死ぬと、戦士たちが首長の遺体を野外に引き出し、これを担って「おおわが首長よ、あなたはわが君主」と歌いながら村のうちを巡回し、行きあつた豚を殺し、カヌーを壊しというように、見つけるかぎりの財物すべてを破壊した。それで、村はあたかも戦争で掠奪されたかのような光景を呈した (Williamson 1933: 240-241)。

ウィリアムソンは、この破壊はおそらく首長の靈魂のためになされたのであろう、と解釈している。

この報告では、ハワイのばあいによく似てはいるものの、傷害や殺人について触れるところがない。ハワイでは、そうしたことさえもおこなわれたというのである。ところが、こんどは、サヴァイイ島の事例とは逆に、破壊や掠奪こそともなわないものの、傷害が通常のことで、ときとして殺人にまでいたるという例が、タヒチを含むソサイエティ諸島にみられる。これについては、ハワイの事例を報告したエリス自身をはじめ、多くの情報提供者がある (Ellis 1969: 413-414; Oliver 1974: 502-503, 506; Henry 1928:

293-295)。それらによれば、

大首長が死ぬと、親族と従者の若者たちが、腰帯をまとうだけの裸体となり、その体を赤、白、黒に彩色して、見るからに恐ろしげにつくり、司祭を先頭に領土内をねり歩いた。司祭はすっぽりと頭部を掩う仮面をかぶるほか、全身を着飾り、手には2枚の真珠貝でできたカスタネットと、サメの歯を植えこんだ長さ1メートル半もの大鎌とを携えていた。若者たちは手に手に槍や棍棒をもち、それを回しながら行進した。もし、彼らの行手を横切ったり、無礼とみえる態度を示す者があれば、たちどころにこれを打ちすえ、あるいは斬りつけて、ときには死に至るまでの傷害をおわせた。

このため、彼等の接近を知らせる司祭の鳴らすカスタネットの音は、村の人びとの恐怖心をかきたてた。村を通過するとき、司祭は手にした大鎌で家の壁を激しく叩き、屋内の人びとを怯えさせた。屋内の人びとは、じっと息をひそめて、彼らの通過が少しでも早かれと願うばかりであった。戸外の人びとは、身の安全をもとめて、マラエ（土着宗教の祭祀場、神域）に逃げこむのであった。マラエだけが、いかなる暴徒といえども乱入をはばかる「聖域」だったからである。

こうした異常事態は、1〜2週間からときには数ヶ月もつづく。その期間が長ければ長いほど、それだけ死者が喜ぶと信じられていたのである。やがて、遺族の意志によって終息することとなるが、そうはならず、戦争にまで発展することもあった。他の地域の人びとが鎮圧にのりだしたばあいである。双方に同盟者が加担して、全土をまきこむ深刻な戦乱になることさえあった。首長連中の仲介によって戦乱が収まるまでには、多数の戦死者がでた。司祭が仮面をぬぎ、服装を変えると、これが戦争終結の合図となって、平和が回復するのであった。

この異常な慣習は、ヨーロッパ人との接触以後にもつづき、暴行に用いられる武器に、新たに導入された火器まで加わったという。そこまで狂暴化するこの慣習の意味について、18世紀の末にタヒチを訪れた、南海の探検史上有名なイギリス船バウンティ号の、掌帆長を務めていたジェームズ・モリソンは、親族の死のために悲しみのあまり狂気に駆られた行動、と述べている (Oliver 1974: 502)。モリソンの解釈だけでなく、島民自身にもそうした見方があったようで、それは、こうした暴挙を演じる若者たちが、ネネヴァ（「無意識」とか「錯乱」の意）という名称で呼ばれていたことから推測される。しかし、かりに錯乱からでた行動であったにしても、それが一定の様式にしたがってなされていることからみて、儀式化された錯乱であったことは明らかである。

エリスの説明はまた別で、死者が生前にうけた侮辱への報復と、遺族にたいする無礼への懲罰とのために、その人びとは死者の霊にのり移られたものと考えられていた、と述べている (Ellis 1831: 414)。報復とか懲罰ということはさておき、この暴挙への参加

者の異様な扮装、とりわけ司祭の仮装は、死者の霊を象徴しているようにも思われる。

エリスはまた、これが戦争をはじめの手段として利用されたという、政治的な意味も指摘している。

3.5 無法・無秩序を演出する理由——ひとつの仮説——

エリスがハワイについて記述した、王や首長などの社会的に高い身分の人びとの死にともなう、慣習としての無法・無秩序状態の意味を探るために、ポリネシア諸地域に類例を求めてえられた結果が、上に述べたサモア（サヴァイイ島）とソサイエティ諸島の事例であった。さきに触れたように、前者では無差別な財物の破壊だけで、人にたいする危害はなく、後者にあつては逆に、人の危害だけで財物の破壊をともしない。しかし、どちらのばあいも、けっして衝動的な暴動・暴行というようなものではなく、それなりの形式にしたがっている。サモアの例では、首長の遺体を担い、一定の文言を唱和しながらということであつたし、ソサイエティ諸島のばあいでは、いっそう形式化しており、暴徒のスタイルを含めて始まりから終わりまでが一定の型にはまっている。

この両者にくらべてハワイのばあいは、エリスの記述にしたがうかぎり、掠奪、破壊、放火、傷害、殺人といった乱暴狼籍のかぎりがつくされ、文字どおりの暴動の印象をうけるのである。

しかし、それにもかかわらず、そうした事態の起こるのは、首長など高位の人物の死去にさいしてだけであり、ある期間、日常の秩序が失われ、無法がまかり通るといふ点では、ハワイもサモアやソサイエティ諸島のばあいにことならないのである。つまり、この本質において、ハワイ、サモア、ソサイエティのそれぞれの慣習は同じである。

この同一性、あるいは一致を、この慣習がそもそも高位の人の死にともないがちな性質のものであり、それゆえに各地域に独立に成立し、結果的に一致を示した、とみることもできよう。しかし、いまのばあい私は、三地域間の一致を、歴史的な関連にもとづく結果であることまちがいないと考えている。それは、三地域間に民族移動の——とくに、ソサイエティ、ハワイ間のそれは西紀12世紀ごろという比較的新しい時代に——あつたことが、先史的に立証されているからである。

ハワイでは、暴徒が裸のまま走りまわつたというが、ソサイエティ諸島でも暴徒の若者たちは腰帯一本の裸体となつた。ソサイエティ諸島では、人びとはマラエ（*marae*、伝統宗教の祭祀場、神域）に難を逃がれたが、ハワイでもキリスト教の教会領が避難所とされた。ハワイにも1819年の伝統宗教の放棄以前には、ソサイエティ諸島のマラエにあたる、ヘイアウ（*heiau*）と称する祭祀場があちこちにあつた。キリスト教以前の伝統宗教の時代であつたならば、おそらくヘイアウが避難所とされたことであろう。こうした類似からも、その暴力的慣行が同根であることを疑うわけにはいかない。エリスの記述で一目無統制な暴動を思わせるハワイのそれにも、やはりなんらかの形式があつた

のではなからうか。エリスの聞きもらしか、あるいは、のちの変化で失われたか、本来はサモアやソサイエティ諸島と同様に、演出された無法・無秩序であったにちがいない。

さて、それならば、この慣行にはどのような意味があったのであろうか。すでにこれまでに、ウィリアムソン、モリソン、そしてエリスの説を紹介してきた。そのどれをも、誤った解釈であるとして、否定するだけの積極的根拠を私はもたない。それぞれになるほどと思わせるものがあり、各説相互に矛盾するわけでもないから、むしろ相補的に理解することが妥当なのかもしれない。

しかしながら、そうした解釈とは別に、より深いところで、この慣行の意味をとらえることも可能なのではないかと私は考える。

エリスの著書にハワイのその記事を読んだとき、まず私の頭に浮かんだことは、『古事記』に語られた天岩屋神話であった。つまり、アマテラスが岩屋にかくれた結果、世が闇となり「……^{ヨロズ}萬の妖、^{コトゾト}悉に^{オモ}発りき」という条である。天岩屋神話が、神話の類型学からみて日蝕神話に属するにしても、上に引用した句は、明らかにアマテラスが世界秩序の体現者であり、彼女の姿が失われるとき、世の秩序もまた失われることを物語っている。いうまでもなく、アマテラスは太陽神であり、あらゆる生命の源泉、世界の秩序の体現者と観念されて少しもおかしくない。

このあと、すぐに述べるように、ポリネシアでは大首長がそのような存在と考えられていた。アマテラスが神話上の存在であるのにたいして、ポリネシアの大首長は肉体をそなえた実在であるという違いはあるものの、観念的にはポリネシアの大首長もまた、生命の源泉であり、世界の秩序を体現した存在であった。であればこそ、大首長が死を迎えるとき、世の秩序は失われ、アマテラスが天岩屋にかくれたおりと同様な「^{ヨロズ}萬の妖、^{コトゾト}悉に^{オモ}発」る情況が演出されなければならなかったのであろう。そうした情況を続出せず、ただひたすら厳粛、静謐のうちに大葬が運ばれるならば、そのことはかえって、世界秩序の体現者としての大首長の本質を否定することになるのではないか。

ここで当然に想起されるのが、フレイザーがその昔『金枝篇』の中にはじめて集めたことで有名となった、「王殺し」の諸例である (Frazer 1890)。このばあいには、人の世の繁栄を維持するために、少しでも体力の衰えをみえた王、あるいは一定の統治期間のすぎた王は、みずから生命を断つか、弑殺されるかしなければならなかった。これは王があらゆる力の源泉と考えられたがゆえにほかならない。帝威衰えるとき天変地異あり、という東洋に古くからみられる思想も右に同じである。ポリネシアのばあいも同様であり、ただ、ここでは慣行が、フレイザーの諸例とことなる形態をとって発現した、ということなのではないか。

3.6 ポリネシアの大首長の本質——「むすび」にかえて——

さて、ポリネシアの大首長の本質についてである。これについては、ポリネシア人の

宗教観念の基本にある、マナ (*mana*) の観念から説明を始めなければならない⁴⁾。

マナというのは、精霊や靈魂ともことになって、いわば世界を運行させる原動力ともいうべき超自然力の観念である。作物の成長、家畜の繁殖、海や山からの豊かな収穫、人びとの繁栄、そして人の世のあらゆる企ての成功をもたらすものがマナである。ひとりポリネシアにかぎらず、このマナの観念は、南太平洋諸民族のあいだに広くみられるが、ポリネシアでは、身分制と結びついて特異な発達をとげていた。

ポリネシア人の観念では、マナは生物、無生物を問わず、万物に宿っている。ただし、宿っているマナの量はけっして一様でなく、個々の宿主ごとにことなる。マナをごくわずかしかもたない存在もあれば、大量にもっているものもある。マナとはこのようなものであり、こうしたマナをもっとも大量に、というよりも無限に宿した存在が神であった。神はマナの源泉といってよい。

ところで、ポリネシアではマナはけっして一代かぎりのものでなく、系譜的に継承もしくは相続されていく。そのばあい、なにごとによらず長子優先のポリネシア社会では、長子が祖先のマナをもっとも大量に相続し、他は祖先からの系譜上の位置の遠近に応じて、それなりのマナを相続するものと考えられていた。

ポリネシアの社会は、大きく貴族と平民両身分層から構成されていたが、この二つの身分層を区別する規準は、神の系統に属するか否か、ということであった。いうまでもなく、神の子孫にあたるものが貴族である。この氏族のうち、代々にわたって長子継承の原則にもとづく神の直系の子孫こそが大首長にほかならず、彼は前述したマナ相続の原理にしたがって、神のマナをもっとも大量に身に宿した存在、つまり現人神ということになる⁵⁾。

大首長のこのような本質を理解してみるならば、その死にもなるとして、社会の一時的な無法・無秩序状態が演出されたとして、けっして理解できぬことではあるまい。ハワイ、サモア、ソサイエティ諸島の諸例を、私はそうしたものと解釈したい。

なお、ここで私が大首長と称したものは、首長国 (*chiefdom*) の頂点に立つ首長 (*chief*) のことであって、首長国を構成する諸小集団それぞれの長のことではない。後者もまた首長と呼ばれるので、それらと区別するために、ことさらに大の字を冠したわけである。土地の言葉でも、たとえばハワイ語では、アライ (*alii*) という言葉で首長一般をさすほか、これに「大」を意味するヌイ (*nui*) を付してアライ・ヌイ (*alii nui*) をとくに区別することがある。英語文献では、私のいう大首長を、*paramount chief* または *the highest chief* と表現することが多いが、*chief* とだけ記して、区別の曖昧な例も少なくない。

ウィリアムソンが引用したサモア (サヴァイイ島) の例に語られている首長は、大首長のこととみてまちがいあるまい。エリスもまた、ハワイの記事で「王や首長」と述べているが、この首長も大首長であること疑いない。ハワイ王国は、その群島の各地に割拠分立していた多数の首長国を、カメハメハ大王が1810年に征服・統合したことによっ

て成立したもので、カメハメハ大王もその前身は、ハワイ島かぎりの大首長にほかならなかった。したがって、エリスによって王に併記された首長は、とうぜん、王国成立以前のかつての諸首長国の長、つまり大首長をさすものと考えて誤りないであろう。

エリスは、ハワイにおいて、王母の死去にさいしても、無法・無秩序状態のおこることを人びとが懸念して、避難さわぎのおこったことを目撃している。じっさいには、そうしたことはおこらなかったのであるが、もし人びとの懸念が思いすごしではなく、正当な予想であった——ということは、キリスト教以前であればとうぜんにおこった——とするならば、死につづく無法・無秩序の慣行は、ひとり大首長の死去のばあいだけにかぎらず、大首長に準ずる高位の人の死にさいしてもみられたこととなる。かりにそうであったにしても、私は、サモアやソサイエティ諸島の事例にてらして、ハワイのそれは、この慣行の真意が忘れられた結果としての拡大現象であると考えたい。

最後に、この慣行が、ときとしてポリネシアで葬儀にともなう模擬戦とは別ものであることを、付言しておきたい。これもまた、大首長の死にさいしての慣行の一つにはちがいないが、模擬戦では、遺族側の集団と、近隣からの弔問者の集団とのあいだで、儀式的に戦闘が演じられるのであって、暴徒が一方的に荒れ狂うのではない。その意味についてここでは立ち回らないが、この慣行が、本稿の主題としたそれとは別ものであることだけを、念のためにここに書きそえておく。

注

- 1) 原著は1831年刊であるが、本稿では1969年刊の新版 (C. E. Tuttle版) を用いた。この新版では巻名を数字で示さず、*Polynesia; Society Islands; Society Islands, Tubuai Islands and New Zealand; Hawaii*と各巻が地域名で表示されている。それぞれが旧巻の第1～第4巻にあたる。
- 2) ハワイ王国の成立と、その後の略史については、つぎの拙著に述べておいた (石川 1984: 95-121)。
- 3) ポリネシア人の先史=民族移動史については、第二次世界大戦後、考古学と比較言語学による調査、研究がいちじるしく進んだことにより、かなりの部分が明らかになってきた。関係文献は枚挙にいとまがないが、さしあたりベルウッドの著者を恰好の概説書としてあげておく (Bellwood 1978)。
- 4) マナにかんする研究文献はきわめて多いが、ここではさしあたりつぎの2点をあげておく (Handy 1927; Firth 1940)。
- 5) ポリネシアの身分制を論じた文献も多いが、ポリネシア全域にわたってそれを論じた、比較的近年の労作につぎのものがある (Sahlins 1958; Goldman 1970)。なお私も拙著のなかでポリネシアの大首長の神性を、マナとの関連で概説しておいた (石川 1984: 50-69)。